

蕪村発句と趣向 : 「乾鮭に腰する市の翁哉」考

著者	清登 典子
著者別名	Kiyoto Noriko
雑誌名	文藝言語研究. 文藝篇
巻	40
ページ	128-122
発行年	2001-10-31
その他のタイトル	An interpretation of Buson's Hokku
URL	http://hdl.handle.net/2241/9924

蕪村発句と趣向

——「乾蛙に腰する市の翁哉」考——

清 登 典 子

はじめに

一見すると叙景句と見える蕪村発句に、実は古典を踏まえての趣向が隠されており、その趣向を読みとること
で、新しい解釈の可能性がひらけてくることについては、さきに「山の端や海を離るる月も今」の蕪村発句を取
り上げて詳しく検討し、述べたことがある（拙稿「蕪村発句の趣向を読む」『日本文学』平成十二年二月号）。

本稿においても、従来はやはり囑目の景による句として解釈されている「乾蛙に腰する市の翁哉」の蕪村発句
を取り上げ、趣向に注目することで見えてくる新しい読みを提示することとしたい。

初出と成立年次・入集状況

まず、この句の初出と成立年次、入集状況から押さえておこう。この句の初出は十二月二十四日付けの延年宛
て蕪村書簡である。この書簡は文中に「愚老義も当月むすめを片付候て甚いそがしく」と、娘の婚姻のことが書
かれていたことから安永五年のものと考えられる。内容は延年の刷り物への出句依頼に応えたもので「春興」と

前書した「笠にうぐひす鳴やわすれ時」「こちの梅も隣の梅も咲にけり」の二句に続けて、「冬吟」の前書を付した「乾鮭に腰する市の翁哉」の句が並べられ「右三句の内いづれ成とも、御心二叶ひ候を御加可被下候」と書かれている。注意したいのは、この句が、新春の刷り物のために作られたものだということであるが、これについては後に句解を示す折に詳しく述べることとしたい。

この句の成立が安永五年であることは、安永五年秋に起筆され、天明年次にいたる蕪村発句を取める「夜半叟句集」にも、安永五年の項に配列されていることから明らかである。なお、本句は「蕪村自筆句帖」に重複して載っており、その結果『蕪村句集』『蕪村遺稿』の両集に収められている。句形に異同はないが、表記の面ではそれぞれに多少の違いが見られる。本稿においては初出の表記にしたがうこととした。

従来の解釈

つぎに、従来の解釈を見てみる。どの解釈の場合にも、作者が目にした景を写しとって句にしたものという観点はほぼ共通であり、解釈が分かれるのは、主に「腰する」「市」をどのような意味で捉えるかという点にあつたとと言える。

まず、『蕪村句集講義』（明治三三年）では、虚子が「乾鮭が店前などに積み重ねてある上に翁が腰をかけて居るので、から鮭のからびて油気なきと、翁の同じくからびて脂気なきとを対照せしめて面白い」と述べ、鳴雪も虚子の解に賛同している。ここでは「腰する」を「腰をかける」意に取り、「市」を「市場」の意に取って「乾鮭」を「店前などに積み重ねてある」とし、ともにあぶら気の抜けたもの同士である乾鮭と翁とを取り合わせたところに面白みがあると解釈している。

これに対して、木村架空の『蕪村夢物語』（大日本図書、大正六、十年）では、蕪村の句に「市」とある場合には「皆市中の意で、魚市野菜市の事ではない」と『蕪村句集講義』における「市」の解釈を批判した上で、「故

に此の句もやはり市中に見る所の状態として解すべしだ」として、一重さうに乾鮭を提げて行く老人が、途中屢々其の鮭を杖に突いて、ウーンと云っては腰をのばす」と解釈した。乾鮭と翁との取り合わせの意味については、一杖に代はるところが乾鮭であり、杖に代へるところが老翁である、景情二つながら写し得たりと謂ふべきではないか」と、乾鮭を杖代わりとすることによって翁と乾鮭とが切り離しがたく結びつくものであるとの見解を述べ、一鮭と翁との脂肪の欠乏などを云々するは窮せるも甚だしい」と『蕪村句集講義』の解を批判している。ただし「腰する」を「腰をのばす」の意と取ることには無理を感じたものか、「腰する」は面白くないが、これは私（稿者注 蕪村を指す）の癖だ」と弁解とも取れる言い方をしている。

この木村架空の解釈をほとんどそのまま踏襲したとも言えるのが、清水孝之氏の『与謝蕪村集』（新潮社、昭和五十四年）で、「市中へ買物に出てきた老翁が、枯木のような乾鮭を杖にして、休み休み腰を伸ばしている」と解する。ただし「腰する」については、「腰を伸ばし、またさするさまか」と、やや歯切れの悪い書き方となっている。

これに対して、尾形仿氏・森田蘭氏の『蕪村全集』（講談社、平成四年）においては、一年の市の店頭に並べて下げられた乾鮭を、腰をさすりながら見上げている老人。どちらも干からびた同士の、真っ直ぐに突っ張った乾鮭と腰の曲がった翁との対照」という解が示された。これは先に見た「句集講義」の虚子解にやや近いものの、「市」を「年の市」とはっきりと定め、「腰する」を「腰をさする」の意とすることで、老人が乾鮭の上に座っている姿ではなく、乾鮭を立つて眺めながら腰をさすっている姿を詠んだものと捉えた点に新しさがある。乾鮭と翁との取り合わせについても、ともにあぶら気のないもの同上の取り合わせである点に面白さを見た虚子の解を踏まえながらも、そこからさらに一歩すすんで、同じように干からびたものでありながら、真っ直ぐな乾鮭に腰の曲がった老人という対照的なものを取り合わせた点に面白さを見ようとしている。

以上、従来の解をざっと通覧してみたが、先に述べたようにどの解の場合にも、この句が生活の中で目にする一情景を詠んだものとして捉える立場は共通していた。また、一句の面白さについても共通して「乾鮭」と「翁」

との組み合わせという観点からなされていた。

しかし、この句の面白さは本当に「乾鮭」と「翁」との形態上の類似性あるいは対照性にあると言えるのだろうか。先に見た初出書簡において明らかのように、この句は翌安永六年の春に出される刷り物用として「春興」の句とともにつくられた句である。「春興」句として作られた「萱にうぐひす鳴やわすれ時」「こちの梅も隣の梅も咲にけり」の二句には春の代表的景物である「うぐひす」と「梅」とが取り上げられ、春を迎えた喜びの心が感じられるのに対して、この二句とともに作られた「乾鮭に」の句のみが冬の市井の一面、しかも乾鮭と翁という干からびたもの同士を取り合わせに着目した囁目吟として、春を迎える心とは無関係に解されてしまっているのだろうか。

以下において、語句の意味を検討しながら、一句が背後に踏まえる古典の世界を指摘し、そこから見えてくる新しい解釈を示すことにする。

一句の新しい読み

まず、語句の意味から押さえていくと、季語である「乾鮭」は鮭を長期間乾燥させた冬季用保存食のことである。元禄八年の『本朝食鑑』には「松前・秋田および両越の最も多くして、諸州に伝送す。(中略)乾堅なるものは、これを鋸す。」とあるように、鋸で切って食べることがあるほど、固く乾燥したものであった。正保二年の『毛吹草』など初期の季寄せ類においては「干魚の類」として一括して「雑」として載っていたが、保存食として冬季、とくに正月用に求められることが多いことから、延享元年「袖かがみ」をはじめ江戸中期以降の歳時記類では、冬十二月の季語とされることが多い。

また、「市」はここでは単なる「市中」の意ではなく、「冬吟」の前書きからも、年末に立つ正月用品の市である「年の市」を指していると思われる。蕪村には同じように「市」と「乾鮭」とが詠み込まれた「からざげや鳶

もすさめぬ市の中」の句もあるが、これは年の市の上空で獲物を狙っている鳶が固い乾鮭には見向きもしない様子
子を詠んだ句であり、ここでもやはり「市」は「年の市」の意で用いられていた。

次に、これも解釈の上で意味の分かれた「腰する」であるが、これを虚子が「腰かける」と解したのは、おそらく直前に「乾鮭に」と「に」という助詞が置かれていたためであろう。しかし、実際には「腰する」を「腰かける」の意で用いている例は、蕪村発句を含め管見の範囲では見いだすことができなかった。やはり「腰する」は尾形氏、森田氏の解のように「腰をさする」の意とするのが妥当であろう。ではその場合、「乾鮭に」はどう解すればいいのだろうか。「乾鮭を眺めながら」と解することもできないわけではないが、私は「乾鮭によりかかって」の意と取りたいと思う。というのも、ここは『和漢朗詠集』およびそれを典拠とする謡曲「高砂」中の詞章である。

松根に倚つて腰を磨れば 千年の翠手に満てり

梅花を折つて頭に挿せば 二月の雪衣に落つ

を踏まえた表現、と考えられるからである。

『和漢朗詠集』においては、この詩句は卷上春の部「子の日」の項に収まる。「子の日」とは正月はじめの子の日に野辺に出て小松を引き、長寿を祝う行事のことであり、先の詩句は「松の根本に倚つて腰をこすると、千年の松のみどりがわが手に満ちこぼれるようである。また梅花を折り取つて髪に挿すと、二月の雪のように花びらが衣にちりかかると」という意味となる。「松根に倚つて腰を磨」というのは不思議な行動のようだが、長寿を保つ松にあやかろうとするものであり、同じ『和漢朗詠集』の「子の日」の項には菅原道真の「松樹に倚つて腰を摩ることは風霜の犯し難きことを習ふ（松の幹によりかかって腰をこすするのは、風霜に犯されることのない松のたくましさにあやかつて病氣にならないようにするためである）」との詩句も見えるので、子の日にはこのような行動をとることが普通に行われていたことを知ることができる。

しかし、「乾鮭に」の句が踏まえる古典としては、謡曲「高砂」を挙げる方がより適切であろう。なによりも

「翁」が腰をするという設定自体に、「高砂」の世界が意識されていると考えられるからである。周知のように「高砂」は、播磨の国高砂の浦で松の木陰を掃き清めている前シテとツレの老夫婦に、ワキの阿蘇の宮の神主友成が、高砂の松について尋ねると、老夫婦が今掃き清めている松こそ高砂の松であること、高砂の松と住吉の松とは離れていても相生の松とよびならわされていること、自分たち夫婦も姥は高砂、尉は住吉の者であるが仲むつまじくしていることなどを話し、やがて自分たちこそ松の精であると告げ、住吉で待っていると言い残し小舟で去っていく。友成が住吉に行つてみると、そこには後シテの住吉明神が待っており神舞を舞つて友成一行を迎えてくれる、という内容の曲である。前シテの老人は実は住吉の松の精、すなわち住吉明神であつたわけだが、後シテの明神の姿となつての詞章の中に、「松根によつて腰をすれば。千年の翠。手に満てり。梅花を折つて頭にさせば。二月の雪衣に落つ」と、先に見た『和漢朗詠集』中の詩句が用いられている。「高砂」は能の中でも最もよく知られた曲の一つであり、春を寿ぐ祝意に満ちた曲である。老翁が松根に腰をするというイメージは「高砂」の曲とともに広く定着していたと考えてよいであらう。

蕪村の「乾鮭に」の発句は、この「高砂」の世界を踏まえた上で、老翁が腰をするものを、めでたい「松根」から「乾鮭」という卑俗な食物に転じたところに意外性と面白さがあると言えるだろう。「松根」から「乾鮭」への転換は突飛な発想のようにも思えるが、蕪村が「乾鮭」を詠んだ発句の中には

乾鮭や琴に斧うつひゞきあり

風呂敷に乾鮭と見しは卒塔婆哉

など、「琴」や「卒塔婆」などの木製の物に乾鮭を見立てた句が存在しており、「松根」を「乾鮭」に置き換えることも蕪村にとつてはそれほど不自然なことではなかつたと考えられる。

以上の検討を踏まえて、ここで新しい解釈を示せば、一句は、春になればめでたい「高砂」の世界で「松根」によつて腰をするはずの老翁が、年の市では「松根」ならぬ「乾鮭」で腰をすつていることだ、との意となる。

踏まえられた古典を知ることによって一句の面白さ、俳意が、長寿の象徴である松を、卑近な食べ物である乾鮭に転じたところにあつたことが見えてきたと言えよう。

しかもそれだけでなく、「高砂」の世界が背後に踏まえられることで、乾鮭に腰をする年の市の老翁の姿に、松根に腰をする「高砂」の老翁の姿が重ねられ、「冬吟」ではあっても一句には新春の刷り物用の発句として発想されたにふさわしい格・色合いが備わることとなつた、と言えるのではないだろうか。

〔付記〕 本稿は、平成九年九月一日に行われた芭蕉蕪村研究会における口頭発表に基づくものである。席上、深沢眞二氏からは「乾鮭に」の句と「和漢朗詠集」、謡曲「高砂」との関係につき種々ご教示を賜つた。記して深謝申し上げる。